『狭衣』の本文異同

――「右大臣の秘すらん女」について――

一文字　昭子

平安後期の物語『狭衣』の巻一に登場する右大臣女は、堀川関白と狭衣の会話の中に登場し、あとは巻二で再び入内問題の中でわずかに言及されるだけの人物である。物語全体からその果たす役割を考えたとき、筋上の展開に関わることもなく、鍵となるような人物でもない。しかしながら、その登場部分の諸伝本の異同は『狭衣』の中でも目立っており、人物造型も大きな揺れを見せている。物語の本筋には関わらなくとも、『狭衣』の成立時の事情や、物語に対する当時の人々の考え方について、今日私たちに重要な手がかりを残しているのではないかと思われる。そこで、この右大臣女に関わる部分について、諸本の主要な本文異同を提示してその様相を述べ、次に『風葉集』における「右大臣女」の描写との関係、および『源氏物語』末摘花における表現上の関連から、この部分のもつ意義について考察をしてみたい。

該当箇所について

『狭衣』巻一に、主人公狭衣の父、堀川関白が、養女源氏宮を東宮へ入侍させる時期について狭衣に相談している場面がある。そこで堀川関白は、右大臣が自分の秘蔵の娘を一刻もはやく東宮へ入れたい意向を持っていることを狭衣に語っている。その場面、新編日本古典文学全集（以下、新全集と記す）では次のように記す。新全集巻一の底本は深川本である。

東宮の、一日もこの宮のことをいたう心もとながらせたまふに、上も、なほ、とく内裏住みせさせたてまつれ、とたびたびのたまはすれば、涼しくならんほどにと思ふを、右大臣かしづく女、十にならばと心もとながられける、からうじてこの八月に参らせん、とけしきどらるるを、何かは競ろふべきにもあらず。

（六三頁）

東宮は堀川関白が育てている源氏宮が一刻もはやく入侍することを切望している。父帝も同様である。しかし、一方で右大臣が、自分の秘蔵の娘を東宮のもとへ入侍させたいと考えている。そしてその娘が八月にようやく十歳になったので、すぐに東宮のもとへ参らせたいとの意向である。この状況に対して堀川関白は「何を競うことがあろうか」と発言をしている。現実に即して考えれば、一刻も早く入侍させ、皇子誕生を願うのが筋であるから、堀川関白のこの

発言は、圧倒的優位にたっている者の余裕を現していると解せる。[1]その余裕は、この堀川関白の発言の冒頭から明かなように、東宮も帝も源氏宮こそ本命として望んでいるという設定と、源氏宮に優る者はいないという確信に依るものであろう。政治的背景を考える論考もあるが、その場合でも、源氏宮の圧倒的な優位性が前提である。[2]

堀川関白は右大臣の娘の容貌や性格について次のように述べている。

右大臣の秘すらん女、この御容貌にえこそ並ばざらめな。あれは孫王だち、そばそばしう、鼻高に際々しき形にやあらん、とぞ推し量らるる。（六四頁）

新全集ではこの部分を「右大臣の秘蔵しているとかいう女君も、この宮（源氏宮）のご器量にはとても及ばないでしょう。あの女君は、皇孫のように上品ぶって、よそよそしく、鼻が高くて際立った形ではなかろうかと推し量られます。」と訳す。

問題はこの「孫王だち」（イ）と「そばそばしう」（ロ）である。新全集は頭注において、（イ）の方を「流布本などの「孫王だち」に従う」とし、（ロ）の方を「底本「そゐそゐしう」を、内閣文庫本などによって改めた」とする。この校訂は新全集が採用した底本の深川本では次のようになっており、意が通らないために敢えて行われたと考えられる。

①深川本巻一、四十一丁表

みきのおとゝのひすらんむすめこの御かたち

にえこならはさらめなあれはそうかたちに
てそゐ〳〵しうはなたかにきわ〳〵しきかたにや
あらんとそをしはからるゝ

（傍線は筆者）

深川本では、（イ）にあたる箇所の「そうかたち」の「う」の部分は文字を書き直し、さらにミセケチを付し、右に「う」と傍書する（写真1参照）。[3]

写真1

この「そうかたち」は、新全集頭注では「僧容貌」かとし、『狭衣物語全注釈Ⅰ』（以下、全注釈と記す）では「相・かたち」とする。[4]新全集頭注は「僧形」（そうぎょう）という語を訓読みしたものからの推定と思われるが、「そうかたち」という読みの語は大日本国語辞典をはじめ、日本国語大辞典、岩波古語辞典、小学館古語大辞典にも立項されていない。管見の限り他の物語にもこの語の用例はみられない。[5]（ロ）の「そゐそゐし」という語も、今のところ他例を見つけることができない。

次に、吉田幸一氏が鎌倉時代の古写本であるとする伝本類および新全集が巻四に採用し、室町期の古写本とされる平出本の該当箇所

がどのようになっているかを確認する。

②伝為明筆本、四十七丁裏

右のおとゝのひすらんむすめこの御かたにえこそまさらさらめそうかたちにて[6]はなたかにきら〳〵しきさまにやあらんとそおしはかゝるゝ

③伝為家筆本、四十丁表

故のおとゝのひすらんむすめ〇こそまさらさらめいときはなき御かたちにこそあめれあれはそうかたちのうい〳〵しくはなたかにそあらんかし

④伝慈鎮筆本、三十四丁裏

右のおとゝのひすらんむすめえこそまさら〳〵めいときはなき御かたちにこそあめれはそこかたちのちゐ〳〵しうはなたかにそあらむかし

⑤伝清範筆本、五十三丁表

みきんのおゝいとのゝひたすらんむすめの御かたにゑこそならはさらめそうかたちにてハなたらかにきら〳〵しきさまにあらんとそをしはからるゝ

⑥紅梅文庫旧蔵本、二十五丁表

右のおとゝのひすらんむすめえこそまさらさらめいときハなきかたにこそあめれかたちなとのむね〳〵しくはなたかにそあらんそんわうたちてはなたかうてきら〳〵しきさまにやあらんとそをしハからるゝ

⑦飛鳥井雅章筆本、五十一丁裏

右のおとゝのひすらんむすめこの御かたちにえこそならハさらめそんわうたちてはなたかうてきら〳〵しきさまにやあらんとそをしハからるゝ

⑧平出本（巻一）、三十三丁裏

右のおとゝのひせらるゝむすめこの御かたちにこそならはさらめそうかたちにてうい〳〵しうはなたかにきら〳〵しきかたちにやあらんとそをしはからるゝ

（「そうかたち」左傍にミセケチ、右傍に「そんわうたちイ」）

（傍線、囲いは筆者による）

まず（イ）から考えると「そうかたち」「そこかたち」「かたち」「そんわうたちて」と違いが出ていることが確認される。「そんわうたちて」以外は右大臣の娘の「かたち」、全体的な容貌について述べていると解せる。

「そうかたち」を新全集の指摘するように「僧かたち」と読めば、僧のような姿となり、年若い女性に対する形容としては聊か不自然であることは否めない。僧のような姿の女性とは尼姿のことを指しているのであろうか。『枕草子』に「頭は尼そぎなるちごの」とあるように当時のちごの髪形を「尼そぎ」と一般的に称していたことと、この右大臣女がやっと十になったばかりであることから、まだ髪が伸びきっていないさま、つまり「尼そぎ」姿である可能性は高い。しかしそれを「尼削ぎ」という語があるにもかかわらず、あえて「僧かたち」という他例をみない語で表現するかは大いに疑問で

ある。⑥の「かたち」は文脈上、単に「外見」はという以外の解釈は考えがたい。全注釈のように「相・かたち」と解しても同じ外見について指摘した語ということになる。[7] ⑦の「そんわうたちて」のみが、容貌そのものではなく、右大臣女の態度や雰囲気について述べていることになる。右大臣の娘は宮腹のようであり、それゆえに、右大臣がことさらにかしづいて、そのように誇りかに育てているということになる。「たちて」とあるので、実際に皇孫である必要はないがこの先の箇所に「みづからくゆる宮腹の一人娘のやうにやあらん」とあるので、右大臣の娘は宮腹か、あるいはそこまではいかなくとも皇統はひいているのであろう。諸本の異同の中で、この語のみが意味合いを異にするという点は注意しておく必要がある。

今一つ、堀川関白はこの発言の冒頭で「この御かたちに並ばざらめな」といっている点である。「この御かたち」は源氏宮の容貌についてであるから、右大臣女との「かたち」を比較していることになる。源氏宮は「いと際なき」「御かたち」であり、右大臣女の「かたち」は「はなたか」である。すべて外貌について比較していることになり、文脈に乱れがない。明解である。

つぎの（ロ）、「そゐそゐしう」「ういういしく」「ちゐちゐしう」「むねむねしく」は右大臣の娘の放つ雰囲気を描写していることは諸本同じである。これらは「はなたか」という語の前にあって「かたち」を形容する。ちなみに「きわきわしき」「きらきらしき」はすべて「はなたか」の後にあり、「はなたか」という語を形容している。注意すべき点は最古写本とされている深川本が「きわきわしく」であって、「はなたか」が際立っていることを表現しているということである。

さて、問題のはじめの畳語、「ういういしく」は初々しい様、「ちゐちゐしく」は小さい、小柄であることをいおうとしているのであろうか。二つはどちらも右大臣女が十歳になったばかりということあわせて考えれば妥当な描写である。「そ」と「う」、「い」と「ゐ」が紛れやすい字であることを考慮すれば、当初は同じ語であった可能性も見逃せない。「むねむねしく」であれば仰々しいことを現していると考えられる。

諸本の組み合わせを一覧にして整理したものが表1である。

この表から、①と⑧は「はなたかに」の前後に畳語の形容詞をもっているが、それ以外はどちらか一方しかもたないことが指摘できる。このうち⑧の平出本は「初々しい」にもかかわらず「きらきらしきかたち」で、描写が並列しにくい。これに対して①の深川本は「そゐそゐしい」が「初初しい」（ういういしい）に収斂されるとしても、「はなたか」（鼻高）が「きわきわしきかた」（際際しきかた）、つまり際立っているということであって、形容自体には問題はない。ただ、「そうかたちにて」の解釈が、全注釈のような場合は、文意が不自然であることは否めない。②の伝為明筆本は「そうかたち」を女性の僧形、つまり尼姿、尼削ぎと解釈した場合は「髪がみじかい」のに、「きらきらしき」様で同一人物の形容としては背反し、全注釈のように「相・かたち」と解した場合は、文意が不自然である。

以上のことから、「はなたか」の前に畳語の形容がつく本文は、後ろにはつかず、「はなたか」の後ろに形容がつく場合には、前にはつかないという二つの本文が当初あり、双方を取り入れたときに、①の深川本のように形容自体には問題がないが、文脈が不自然なも

表1

	写本	本文〈記述順〉			
①	深川本	そうかたちにて	そゐそゐしう	はなたかに	きわきわしきかた
②	伝為明筆本	そうかたちにて		はなたかに	きらきらしきさま
③	伝為家筆本	そうかたちの	ういういしく	はなたかにそ	
④	伝慈鎮筆本	そこかたちの	ちゐちゐしう	はなたかにそ	
⑤	伝清範筆本	そうかたちにては		（なたらかに）	きらきらしきさま
⑥	紅梅文庫旧蔵本	かたちなど	むねむねしく	はなたかにそ	
⑦	飛鳥井雅章筆本	そんわうたちて		はなたかうて	きらきらしきさま
⑧	平出本	そうかたちにて	ういういしう	はなたかに	きらきらしきかたち

のが発生したという流れが想定される。

その後、「はなたか」という語、および「わ」と「ら」の文字の紛らわしさから、「きらきらし」という形容が生じたという推測が成り立つ。もとより、一つの可能性としての論である。

つまり、右大臣女の当初の像は、幼なくてその外貌が初々しく、鼻が高いことが目立っているというだけのものであったという一つの可能性が指摘できるのである。このことを確認し、次に、他の描写からの右大臣女の像を追ってみたい。

『みづからくゆる』の右大臣女

さて、今一つの右大臣娘の造型について、重要な手がかりは、先にも述べたように「みづからくゆる宮腹の一人娘のやうにやあらん」と堀川関白に言われているという点である。

諸本の本文を次にあげる。

①深川本巻一、四十一丁表

丁のうちよりもさし
いてすいいはもなくこそかしつくなれみつからくゆる
宮はらのひとりむすめにやうにやあらんとてわらひ
給へは

②伝為明筆本、四十七丁裏

はゝめのとよりほかにあたり
にもよせすきわもなくこそかしつかる
なれみつからくゆる宮はらのむすめの
やうにやあらんとてわらひ給ゑハ

③伝為家筆本、四十丁裏
ちやう（の傍書）うちよりもさしいてすハ、めのとより
ほかにあたりに人よせさなりみつからくゆる
宮ハらのむすめのやうにあらんとの給

④伝慈鎮筆本、三十四丁裏
丁のうち
よりえさしいてすは、めのとよりほかに
あたりに人よせさなりミつからくゆは（る傍書）か
りミやはらのむすめのやうにあらんとの給を
（「はかり」左側にミセケチ）

④伝清範本、五十三丁表
は、めとの（「との」に二重棒線、右傍に「のと」）
よりほかにあたりにもすき
まもなくそかしつかる、なれ
ミつからくゆるにミやはらのゆめ
のやうならんやとてわらひ
給へは

⑤紅梅文庫本、二十五丁裏
帳のうちよりもいたさす
は、めのとよりほかに人よせさんなりみつからくゆる
宮はらのむすめのやうにてそあるらんとのたまふに

⑥飛鳥井雅章本、五十二丁表
○（傍書「ハ、」）めのとより外にあた
りにもよせすきハもなくこそ
かしつくなれみつからくゆる宮
はらのむすめのやうにやあらん
とてわらひ給へは

⑦平出本、三十三丁裏
丁のうち
よりもさしいてすは、めのとよりほかにはあたりに
人もよせすきはもなくこそかしつくなれと身つ
からくゆるみやはらのひとりむすめのやうにやあらむ
とてわらひ給へは

（括弧は筆者による）

ここで引かれている散逸物語『みづからくゆる』は『狭衣』の当該本文と、定家本『更級日記』奥書、『風葉集』に九首ある和歌からその筋が推定されている。『風葉集』は文永八年（一二七一）成立の歌集であるが、その成立には後嵯峨院の意向が深く関与し、藤原為家が選集に関わっていたと考えられている[8]。

「宮腹の女」は『風葉集』巻一三・恋三にある「右のおほいまうち君の女」の歌から人物像が推定されている。

おろかなるさまに思ふらむとおぼゆる女に、もののみ心ぼそき
よしかたらひ侍けるついでに　みづからくゆる左大将

命だに世にながらふる物ならば君に心のほども見えまし
　かへし　　右のおほいまうち君の女
ながらふる我身のうきを思ふより外には人をうらみやはする（D）
（Dは後述の便宜上、筆者が付け加えた。）

松尾聡氏はこの歌から、右大臣女について、以下のように述べている。[9]

「その贈答歌の内容殊に女の返しのすなほさ等から考へて、左大将のこの疎遠は、必しも他の女へのすき心などに因るものではなく、肉体の衰へを直接の原因とし、時代のほの暗さを間接の、さりながらむしろ根本的な原因としたそこはかとなき厭世観に因るのではないかといつたやうな感じがする。それにしても、此のDの返歌の素直さは右大臣の女程の身分にある者としては洵に珍しい。少くともこの一首で考へる限りに於ては、此女も亦性格的には「尚侍」同様、夕顔・浮舟型と云はねばなるまい。」

樋口芳麻呂氏は松尾氏の論を踏まえた上で、以下のように述べている。[10]

「堀河関白の言葉の中に出てくる「みづからくゆる宮腹の女」とは、この右大臣女をさすのであろう。」と述べられ、『狭衣』の「孫王だち、鼻高にきらきらしき様」という文から「『みづからくゆる』の右大臣女は、母が宮で、本人は鼻高できらきらしく、周囲から大切にかしづかれていたのであろう。そのような誇り高そうな女であったので、左大将は、自分の途絶えを姫君が自尊心を傷つけられたように思っているだろうと気遣い、（7）の歌（命だにの歌）を送ったのであろう。が、その返歌である（8）（ながらふるの歌）を読む限りでは、右大臣女はあまり誇り高い姫君とも思えない。身分・外観に比し、意外に内攻的なしおらしい女性であったのだろうか。」

小木喬氏も同様の意見である。[11]三氏の『風葉集』の歌からうける右大臣女の印象は、夕顔・浮舟のような内攻的でしおらしい女性である。『狭衣』の異文の一つである右大臣女の形容、「孫王だち、鼻高にきらきらしき様」とは明らかに相反している。しかし『狭衣』に登場する右大臣女が、伝為家本や伝慈鎮筆本などが伝えるであろう、まだ十歳になったばかりで、初々しいさまの女であれば『風葉集』の右大臣女像とのずれは解消される。つまり樋口芳麻呂氏が前述の引用文の中で、「右大臣女はあまり誇り高い姫君とも思えない」と不審を表明されているが、『風葉集』のみた『狭衣』本文が伝為明家本や伝慈鎮筆本などの本文をもっていたとすれば何の問題もないのである。『狭衣』は多くの異文が伝わるが、「みづからくゆる」と関わりを持つ「右大臣女」は該当部分の女一人であることからこれが『風葉集』に載る「右大臣女」と照応することはまず動かない。したがって、『風葉集』が採った『狭衣』では右大臣女は伝為家本か伝慈鎮筆本などと同様の本文をもった『狭衣』が描き出す右大臣女であったと考えられる。

なお、伝為家筆本『狭衣』と同様の本文を持った『狭衣』が『風

葉集』の依拠本として採用された可能性が高いことは、中城さと子氏が『風葉集』側から精査され、出された結論と一致する。[12]『風葉集』選者としては為家が有力であることから考えて、これは妥当な結論といえる。片岡利博氏および中城さと子氏は、中世においては極力由緒正しい本文を求め、できるだけ忠実にそれを再現しようと心がけていたとされる。[13]とすれば、『風葉集』が描き出す右大臣女が、少なくとも中世においては、『狭衣』の由緒正しい本文の女と考えられていたということとなる。

「鼻高」について

さて、右大臣女の今一つの特徴は「鼻高」である。先の表1からも明白なように「きわきわしき」「きらきらしき」という語は「はなたか」の後にあり、「はなたか」をより詳しく規定している。「きわきわしき」は「はなたか」が際立っていることを規定しただけで、「はなたか」が「尊大・上品ぶって・高慢」であるということまでは示唆しない。しかし「きらきらし」は「はなたか」が単に鼻が高いという事実だけでなく、そこから派生した華麗という意味を補う語である。

ここで、平安期の物語において「鼻高」という形容された女でまず最初に思い出される『源氏物語』末摘花について考えて見たい。『狭衣』が『源氏物語』の強い影響下に成立したことは一読すれば明かであり、また諸氏の指摘も多いからである。末摘花は『源氏物語』において、次のように形容されている。

あなかたはと見ゆるものは鼻なりけり。ふと目ぞとまる。普賢菩薩の乗物とおぼゆ。あさましう高うのびらかに、先のかた少し垂りて色づきたること、ことのほかにうたてあり。

（新日本古典全集『源氏物語』①二九二頁）

末摘花は、「末摘花」巻では醜貌の烏滸者として描かれるが、「蓬生」巻では純朴で一途な人柄ゆえに源氏に迎えられ、親王女として相応しい生活を送るようになる。末摘花の人物造型の違いは単に語り手の視点が変化したもので、洗練されてはいないが、一途で誠実な人柄は末摘花の本性であるという。[14]末摘花における「鼻高」は単に醜女の常套的形容として用いられているだけであって、そこには「尊大」や「上品ぶる」という意味合いはない。

『狭衣』よりあとの『今昔物語』巻二十六・第十七においても、「鼻高」は、「鼻高ナル者ノ、鼻崎ハ赤ミテ」[15]とあるが、そこでも「尊大・上品ぶる」という要素は含まれない。こうした前後の物語における使用例からみても、『狭衣』の右大臣女は単に鼻が際立っているという外貌上の特徴をもった女と造型されただけではないかと考えられるのである。

大日本国語辞典では「はなたか」の項には単に「鼻が高きこと。又、そのもの。」とあり、以下に続く二、三、四の用例にも「尊大」や、「得意げ」といった意味が挙げられていない。ただ、続いて新たに「はなだか」という濁音の項をたてて、その二番目に「自慢らしきさま、得意になるさまにいふ語」として、『狭衣』の当該部分をあげる。[16]しかし『狭衣』の当初の右大臣女の造型が伝為明筆本などのような記述であったならば、むしろ、鼻高という語に引きずられる形で意のはっきりしない部分が「孫王だつ」となり、「きわきわし」

が「きらきらし」と変じ、あるいは改変され、『狭衣』の本文が変化したとも考えられる。

少なくとも、『狭衣』が強い影響を受けた『源氏物語』において、「鼻高」の姫に、「尊大・上品ぶる」という意はみじんもないということは看過できない事柄である。また国宝源氏物語絵巻の「蓬生」巻では老女の横顔が鼻高に描かれているが、これは身分が低い貧相な様子を表現し、窮乏した末摘花邸の状況を示したもので、やはり「鼻が高い」ということから引き出される「得意気・尊大・上品ぶる」等の要素はない。

こうした前後の物語類を踏まえたとき、『狭衣』の右大臣女の「鼻高」は、血筋はよいが、鼻が高いという点で器量が劣り、箱入り娘の典型として設定された特徴と捉えるのが妥当であるといえそうである。

結論

散逸物語『みづからくゆる』に登場する右大臣女は内攻的でしおらしい女であった。『狭衣』の一部の異本も同様の右大臣女を描いている。二種類の文学作品において、一致する「右大臣女」は「内攻的でしおらしい女」である。また『源氏物語』に登場する末摘花は親王の娘で、鼻が高く醜貌であるが、性格は純朴であった。『狭衣』の一部異本の描き出す右大臣女は鼻が高いという特徴があるが、同時に「初々しい」と形容されている。

『狭衣』の右大臣女について、主人公狭衣は父関白が右大臣女のことを「はなだか」といったのを聞いて、そのすぐあとに、「かの思ひかけざりし宵の火影は、さしも白玉の疵までは見えざりしかど、鼻高は言ひあてたまへり」といっている。これは諸本共通する文である。狭衣は右大臣女の鼻高は、堀川関白が噂から想像するほどは際立ったものではないが、しかし「高い」という範疇には十分入ると思っている。ここでは狭衣は「鼻高」を単に外貌的な特徴としか考えていない。このことからいっても右大臣女の「鼻高」という形容に当初は「尊大・上品ぶる」の意は含まれていなかったと考えられる。

「右大臣の秘すらん女」は『狭衣』という物語全体からみれば、話しの中だけに登場する人物である。しかしそれにしてはこの部分の古写本間の本文異同が目立って甚だしいということは、一体何を示唆しているのであろうか。一つの可能性として、『狭衣』の本文が、この時点まで創られた段階ですでに流布し、作者も読者も今後、この女が物語にどこまでかかわるかは未知数であったということが考えられる。源氏宮と競う形で入内する姫君は、読者の想像を刺激したであろう。そのため、その人物造型をめぐってさまざまな書きかえなどの試みが生じ、異同が激しくなったのではないだろうか。こうした物語の作成方法は現代においてもみられる現象であり、とりたてて珍しいことではない。片岡氏は狭衣の本文の主要な異同は平安時代人の所業であるとされる。中城さと子氏はさらに鎌倉初期までその範囲を広げ、『風葉集』成立時期までには主要な異文は成立していたと推定されている。両氏の推定に異論はない。個々の異同を精査したときに、基本的な異文の上にあらたに後世において行われた改変も指摘されうるであろう。現在の異文には幾重にも重なった異なる時代の痕跡が残されていると考えるべきである。この右大臣女に関わる異文、表1をみたとき、最古写本とされる深川本、そ

の他平出本は「はなたか」の前後に畳語の形容をもつが、その他のものはどちらか一方であるというかなり明瞭な特徴が指摘できる。つまり「そうかたち」に重点を置いたものと、「はなたか」に重点を置いた双方の読みがあって、そこから異文が発生（あるいは作成）されたと思われる。

これらの中で「そんわうたちて」という語をもつ飛鳥井雅章筆本は吉田氏の解説によれば、自筆本で、子孫の為に書き残したものと推定されている。飛鳥井雅章の生涯は慶長十六年（一六一一）三月一日から延宝七年（一六七九）十月十二日であるので、江戸前期成立、古写本の中では一番時代が下るものである。他に「そんわうたちて」という語を持つ本文は『校本狭衣物語』によれば、古活字本に見られるだけである。ちなみに日本国語大辞典は「鼻高」という語の「得意になること」とする項目で、『狭衣』の用例の後、浄瑠璃の「彦山権現誓助剣（一七八六）」五の例、「なみ大体な鼻高では、たんのうする事あるまい」を掲げる[17]。

この二点から考えて、この語は近世に入ってから、「はなだか」と「きらきらし」に引かれて作成された、比較的新しい異文ではないかという可能性が浮上する。「宮腹」という語から「そうかたち」に変化が起こり、それが「そんわうたちて」となっていった過程が想定されるのである。

しかしながら、この「孫王だちて」「きらきらしい」女という新しい造型が疑われるものを除いても、この部分の異同が多いことにはかわりない。これらの異文が古代においてすでに基本的には発生していたとすれば、『狭衣』が一つの物語として比較的まとまって創作されたにせよ、個々の段階においてすでに異文が発生し、そのせめぎ合いの中から筋が規定されていったことを示唆すると捉えてもよいのではないだろうか。全体からみればとるにたらない右大臣女の造型にこれほど揺れが生じたのは、この女も場合によっては物語の主要人物をなる可能性を、初期段階で有していたためと考えられる。物語が、源氏宮を斎院とし、入内の可能性を否定したとき後宮における競争相手となる右大臣女の存在も必要ではなくなった。しかしそれまでは、右大臣女は作者・読者とも主要登場人物である源氏宮に関わる存在として、興味の対象であった。「右大臣の秘すらん女」は最終的に物語の取るに足らない存在となったがために、はからずも物語創作過程を窺わせる、重要な存在となり得たということになる。

注

(1) 内閣文庫本を底本とする岩波大系『狭衣物語』では「（それが）やっと（その年頃となって）、この八月に入内させようと、右大臣が用意されているのが察し知られるのにねえ。いや別に、競争する必要もないですな。」として、堀川関白の余裕のほどを印象づける。

(2) 堀口悟「『狭衣物語』鼻高姫譚の意義―貴族政治と婚姻との見地から―」（『源氏物語の時空王朝文学新考』笠間叢書三〇六・平成九年）

(3) 私家版「古典聚英」1狭衣物語上〈深川本〉（古典文庫・昭和五十七年）より

(4) 狭衣物語研究会『狭衣物語全註釈Ⅰ巻一（上）』（（株）おうふう・平成十一年）

(5) 日本古典文学大系（岩波書店）に収録された物語を対象とした。

(6) 「おしはかゝるゝ」の部分はやや不審であるが、表記通り。

(7) 全注釈ではこの部分「顔立ちや物腰も」と訳している。

(8) 樋口芳麻呂『平安・鎌倉時代散逸物語の研究』（ひたく書房・一九八二年）

(9) 松尾聡『平安時代物語の研究』（東宝書房・一九五五年）

(10) 樋口芳麻呂『平安・鎌倉時代散逸物語の研究』（ひたく書房・一九八二年）

(11) 小木喬『散逸物語の研究　平安・鎌倉時代編』（笠間書院・一九七三年）

(12) 中城さと子「『風葉和歌集』の依拠本―『狭衣物語』の場合―（その二）」（「風葉和歌集研究報」第八号・二〇〇八年三月・名古屋国文学研究会）。「（四）『狭衣』巻一入集歌の依拠本の再検討」において「前稿において、『狭衣』巻一からの入集歌に関しては、160歌から《押小路本》、972詞から〈為明本〉の二本を依拠本とするとともに、〈深川本〉を加えた三本が依拠本になったと考えた。（中略）しかし、調査を進めるにつれ、1046歌と一致する本のうちの為家本が注目されてきた。為家本は、『風葉集』との一致率が《押小路本》とともに最も高い値（63.6％）を示しているからである。」

(13) 片岡利博氏は「中世以後の人々」とされ（「平安時代人と文学」、「国語と国文学」東京大学国語国文学会、平成十四年五月）、中城氏は片岡氏に対して、「「中世の人々」と限定したい」とされる（前掲論文）。

(14) 松田武夫「末摘花」（『國文学』昭和三十二年五月）、山本利達「作者の人間理解―末摘花を中心に」（『源氏物語の探究』十・風間書房・昭和六十年）など

(15) 「鼻崎ハ」の「崎」は頭注に「正字は「先」。」とある。今昔物語中にこの用字法はいくつかみられる。

(16) 日本国語大辞典では三番目に「得意になること。自慢すること。また、その人やそのさま。」として狭衣物語「はなだかにきらきらしきかたちにやあらんとぞ」と用例を挙げる。

(17) 日本国語大辞典、ジャパンナレッジ（オンラインデータベース）http://www.japanknowledge.com.（参照 2009-10-29）